名譽教授竹田復先生の思い出

内山知也

かつて私は竹田復先生（一八九一～一九八六）の追悼文を財團法人斯文會の雑誌『斯文』第九三號（一九八七年十二月刊）に書いたことがあるが、もう二十年近くの昔になってしまった。このたび大東文化大學漢學會から思い出の記を書くようにと御依頼があって氣輕にお受けしたものの、さて何をどう書けばよいか悩み續けてとうとう年を越してしまった。

記憶は歳月と共に薄れ、あるいは大切なことをみごとに忘却して、もうこれだけだと思いがちなのが私の悪い癖であることをまずお見逃がしいただきたい。それに若い卒業生の皆さんや教職員のかたがたに、竹田先生の生前のお姿や、學問などの事について興味を持って下さるように書くことは、「難中之難無過斯」である。

しかし私は竹田先生が東京文理科大學漢文學專攻の主任教授でいらっしゃる時ご指導をいただき、さらに先生のご推薦で大東文化大學に奉職することができた身であるし、それ以後お亡くなりになるまでお教えを受けたのだから、思い出などは山と積もっているはずである。五十歳の時の先生におめにかかり、九十六歳の先生をお見送りする、この長い歳月には樂しい思い出がたくさんあったのだ。今この時に書いておかなければ次にいつ書けるという約束もない。忘却は恐ろしいものである。

竹田先生は昭和三十九年四月より四十四年三月まで教授として本學に在職されたが、それ以前、またそれ以後長く非

常勤講師として教壇に立たれた。私は四十二年四月から四十九年の間と六十二年から平成七年までの二度に渡って専任として在職し、その中間筑波大學に赴いていた時は非常勤講師であったので、二十餘年も一學生として教えていただいたわけである。まことに有難いご縁という他はない。

（1）先生と煙草

先生はよくご自身が少年のころ喘息で苦しまれた話をなさって病弱な私を勵まして下さった。

先生は小柄でとても頑健そうにはお見受けしなかったが、九十三歳まで教壇に立たれた。先生のお話によると、師範附屬竹早小學校に入學のころから喘息に苦しまれたので、父君左膳先生は氣候の好い靜岡に轉任して先生の健康回復に努められた。縣立靜岡中學から舊制第一高等學校に入學し、機械體操（鐵棒などの器具を使ってする運動）をなさってからめきめき元氣になられた先生は、漢學者の左膳先生の影響で中國文學研究の方に進まれた。

大學の教室で教えていらっしゃる先生は、とても鐵棒で大車輪をやっておられたとはお見受けできなかった。食糧難の時代である上に衣料も統制で、學生の半分は復員歸りの軍服だった。先生はお身體にぴったりの特別注文の背廣とピカピカの靴を履いておいでになる。當時大學でおしゃれな先生は西洋古典學の高津春繁教授くらいのものであったから、目を見張った。それ以上驚いたことは授業の中間時點で「さあ一服しましょう。皆さんもどうぞ」とおっしゃって懐中から煙草を取り出されることであった。

當時の教室には學生にも一人ずつ大きな机と柔らかな椅子が與えられており、机の右上の隅に圓形の窪みが刻ってあった。どうもそこには鑄物か何かの灰皿が置いてあったらしいことはこの瞬間にわかった。

先生が吸われるから學生も闇煙草（配給以外の煙草で闇市で賣っている粗惡品）を指で伸ばしながら吸い始める。十分も過ぎると教室中は煙が充滿する。この間の先生の雜談が實に面白かった。質疑應答もこの時である。國語國文學の能勢朝次教授は心敬の連歌の演習を擔當していらっしゃったが、學生の演習發表になると窓際の椅子で一服しながら批評なさる。教室の學生は緊張で煙草どころではない。

先生の愛煙癖は宇野精一博士の前記『斯文』の追悼文にも書かれていて、喘息の病氣によくないのではないかと心配された由である。元宮中の女官でいらっしゃった姉君に、先生の奥様のご葬儀の休憩室でおいしそうに煙をくゆらせている先生が「復、そんなに吸って身體に障るんじゃないの。そろそろやめたらどうなの」と言われて返辭に窮していらっしゃったのを憶えている。そんな些細な姉弟の間の對話を耳にして忘れないのは、私にはそういう優しい兄弟姉妹がいなかったからかもしれない。

(2) 先生と梅干

中國文學科の課外の部活動に「中國文學研究部」というのがあり、「中文研」と略稱されていた。現在もその傳統は續いているだろうか。

このクラブでは、毎年中國古典の有名な作者作品、あるいは經書などを取り上げ、放課後輪讀會をやっていた。春夏の休みには日本各地の旅館や宿泊所を利用して五六日間の合宿研究を行なう。テキストや辭典類を携え賑やかな團體旅行からそれは始まる。

早朝ラジオ體操を行なった後、名文の齊唱をやって心を爽やかにし、宿舍に入って朝食になる。その地の名物が出る

のでみんなそれが樂しみだった。

竹田先生は若い學生たちに混って毎年の合宿に參加され指導された。若い學生たちと一緒に過し語るのが若返りの一方法だと笑いながら朝の輪讀の指導に當られる。

晝食の後は宿舍の近くを散策される。淡路の海岸・佐渡の海・遠刈田の溫泉宿・阿房白濱の濱邊・猿ヶ京のダム湖岸。懷しい風景の中に、青年壯年に圍まれていらっしゃる先生のお姿が目に浮ぶ。

午後の讀書會が終って夕食。樂しい食後の懇談や先生の短い講演。入浴後學生は明日の下調べで實に精力的に活動する。先生の個室には教員たちがお邪魔してお話を伺う。

竹田先生の梅干は、朝食の時に數個の小梅が小皿に載せられて先生の前にだけつくものである。若い者は誰も欲しがらず、むしろ怪訝な顔で見ている。先生は「朝の梅干しは健康にとても好いんですよ」と微笑しながらおいしそうに召し上がる。食欲向上・血液淨化・などと效能はおっしゃらず紀州の小梅の美味しさについて語られる。先生の少年時代に習慣になったものかどうかは忘れてしまったが、小梅は毎朝先生のお口にすべりこみ、カリカリという音と共に煙草の脂を拭い清めていたのかも知れない。一度も酸っぱそうな表情をなさらなかったのはよほど好んでいらっしゃったからであろうと思う。

(3) 先生と學會

日本中國學會という日本全國の中國學研究者たちによる學會が成立したのは、終戰後まもなくである。竹田先生は創立の時からの理事で活躍していらっしゃった。

理事會から專門委員が選ばれ、學會報に投稿される會員の論文の審査に當る。當然先生は最近の若い研究者たちの研究テーマを知悉しておられ、その動向を教えて下さるから有難かった。理事はまた學會の運營のための會員募集や學會發表の希望者を大會に送りこまなければならない。活動の活發な理事の周邊からは發表者が多く、若い學者が育ってゆく。中高年で既に經驗の多い年輩者は別として、若い院生たちは指導教授が頼りなのである。

母校の學會の發表會など、若年から壯年に及ぶ順序にプログラムが組まれているので、トップに番が來る二三年間というものは、聽衆の數も寥々たるものだ。その上質問は先輩の嚴しい叱咤が加わるから容易ではない。その點日本中國學會は全く甘えがきかないので最初はずたずたにされるのを覺悟で發表する。毎回さっと手を擧げて質問やら示唆を與えて下さるのは京都大學の吉川幸次郎教授、自分の教え子に懇切に指導的質問をなさるのは慶應義塾大學の奥野信太郎教授、それぞれ個性的な專門委員の理事たちが眞っ先に立ち上がって下さった。竹田先生は質問などなさらずニコニコしていらっしゃる。あとでご意見をうかがうと優しく懇切にお話下さる。今から思うと、昭和三十年代前半の理事たちは若い研究者を育てるために非常に情熱を傾けておられたのだということが感じられる。

戰後二十年も經つと博覽强記で高名な學者が次々と世を去り、時代は歐米ふうに論文の數を稼がなければならないようになってきた。その爲に、教授は院生が獨立できるまで新しいテーマを示唆し、新しい方法に興味を持たせるように指導しなければならなかった。現在のように資料文獻や論文が簡單にインターネットで入手できる時代ではなかったから、教授の情熱は院生の論文のレベルに正しく比例していたと思う。

竹田先生は學會發表の部屋の最前列に坐られるのを常としておられた。先生は義務として出席されているのではなくいつもこうおっしゃっていた。

「今年はどんな優秀な學者がどんな新鮮な發表をするか。それを發見するのが樂しいからなんです」

先生は質問すれば必ず答えて下さる。質問しなければ何も仰言らずニコニコしていらっしゃる。ご自分の意見を押しつけたり、理解の遅い學生たちを叱ったり怒鳴ったりはなさらなかった。正に「不憤不啓、不悱不發、擧一隅、不以三隅反、則不復也」というのが先生の指導法だったのではないかと今さらのように思い出している。

（4）先生の調和論

中國人は調和を求める民族であるとよく先生は仰言っていた。國共鬪爭、權力鬪爭に明け暮れしていた當時の中國で、どこに調和があるのだろうと私などは考えていた。調和のためには妥協もあるんですと仰言る。魯迅は共産主義者じゃありませんよとも仰言る。

先生は元曲の研究で文學博士號をとられ、まもなく東京文理科大學に就任なさったので、元曲の講義の中で特に調和の論を指摘されたように思われる。もう一つ聽講した「中國文學概說」では主として唐詩のお話だったが、ここでは平仄・押韻・對隅・起承轉結の詩律音韻の調和は常識的に理解されるが、先生の調和論はそこに止まるものではなかった。

先生は戰後最初の漢文教育復活運動の主唱者であった。大東文化・日大・東洋大等漢文教師を育成して長い傳統のある私立大學に關係され、國立の高師・文理大・東大に籍を置かれていた立場としてその運動の中心に身を置かれた以上、先頭に立って活動されるのは當然だという見方もあろう。しかし先生は中國言語學研究を主目的として北京に留學されたお方であり、學界の中には漢文教育に反對し、中國古典は中國音で讀んで理解すべきだという人も多數あって事あるごとに對立していた時代であった。先生はいわば併用の立場に立っておられた。中國音だけで中國古典を讀むのは中國人の理解の早さには到底追いつけない。訓讀で白話文を讀むのは困難極まる。どうしても兩方を學習した方がいい。訓

讀を廢止したら日本人が長年培ってきた文化の重要な部分が喪失してしまう。これは恐ろしいことだと考えておられた。從って先生はまず中國語でテキストをお讀みになり、訓讀を利用して譯をつけられる。元曲はその最適な教材であった。元曲の大部分は白話である。しかも重要な部分に文言がどっしりと控えて全體をひきしめている。中國音だとどうしても流し讀みにしてしまうところに重要な主題に關することばがある。そこは日本人にとって訓讀した方が味の出てくる樂しい部分であり、又不遇だった元代の劇作家たちの知識人としての誇りや證しが祕められている所だから、ドラマの社會性・人民性を論じる見方とは異なる藝術性が馨ってくる部分である。

先生は膨大な中國音韻學關係の圖書を所藏しておられ、現在その大部分が大東文化大學圖書館に所藏されているが、恐らく先生はこの方面の研究者になろうとなされたのであろう。中國で購入されたと思われるそれらの圖書は先生宅の書齋や廊下にぎっしり積み重ねられてあった。その中に元曲關係の圖書がどの位含まれていたかは圖書館で調べるしかないが、先生は北京留學時代に戲院に入って古典演劇をごらんになった。日本からの訪問客があるとよく案内されたそうだから、二度や三度のことではないだろう。しかし戲迷になるほど特定の演員で夢中になったとは伺わなかったまでも、梅蘭芳の表演には感動していらっしゃった。

戲院に入った先生は賣店で本日の出し物の演目案内書を購入され、それを携えて席に着くと隅の通人らしい人に今どの場面をやっていますかと聞かれるらしい。いきなり劇の途中から見ても初見の演目だったらわからないのは當然だからだ。現今の演出はほんの一齣か二齣しかやって見せてくれないのが普通であるが、明代傳奇昆劇の影響を強く受けた京劇は全篇何十齣などという長編があって、朝から晩までぶっ續けで演出されていた。だから途中の名場面から見たい人はその頃を見計らって戲院に入るし、食事がしたくなれば上演中でも飲食を始める。古い戲臺では高い舞臺の前には丸いテーブルが何卓も置かれていたから先生は或いはそういうテーブルの椅子で煙草をふかしながらごらんになったか

もしれない。

先生の調和論はこの演劇京劇の觀覽中に生まれたのでなかろうか。さまざまな歌曲を主役が透き徹る聲で歌い、白が飛びかい、優雅で美しい型の科で演員全員が場面の雰圍氣を作り上げる。背景はなく、小道具もすべて象徴的なテーブルと椅子くらいしかない單純な舞臺構成の上で、觀客を醉わせるのは、曲の歌詞とメロディが最も中心になる。主役（正末正旦）は拔群の歌唱表現力で古典の曲牌を一曲一曲こなしてゆく。同時に舞も科白も表演するのだから大變な重勞働である。男優でなければ體力的には不可能だったろうが、後世短編化し、さわりの場面しか演じなくなったから女優でも可能になった。先生のごらんになったのは全齣を演じていたころの京劇であったと思われる。

先生はここで音樂と歌詞、所作とせりふ、多くの俳優の交錯する舞臺の動き、俳優の隈取りや衣裝、樂隊の笛笙、鑼鼓、琴や二胡、等の演奏と歌唱や所作との間髪を入れない呼吸の一致をごらんになって、中國人の音韻調和や構成の調和に思いを致されたものと思う。これは昆劇を見始めてやっと氣がついた私の恣意的感想である。

（5）蝴蝶夢雜劇と先生

「蝴蝶夢」という古典劇は現在二種類あって、一つは現在昆劇で演じられているもので明の謝國字は弘儀作の四十四齣本をもとに八齣に改編したもの。もう一本は敎室で學んだ元曲「包待制三勘蝴蝶夢雜劇」關漢卿撰である。兩者は主人公が蝴蝶の夢を見ることは同じであるが內容は全く違っており、前者の主な登場人物は莊周と田夫人、後者の主人公は中牟縣の讀書人王氏の妻と、包待制こと名裁判官包拯である。

詞や曲など讀んだこともない私は、白の部分の意味は何とかなっても、曲に至ってはどこで句切るのかさえわからな

かった。そこで質問すると『太和正韻譜』をごらんなさいと教えて下さる。押韻がわからなくなると、『中原音韻』『中州音韻』で調べてみて下さいと仰言る。各所ごとに宮調が變り套曲も變るのは何か決まりがあるのだろうか。そのお答えはもうすっかり忘れてしまった。すべて「葫蘆提」になってしまったのである。

學生は當番制でめいめい自分の受持ちを調べて教室に臨む。

まず王家の兩親と三人の男の子が登場し、父親が三人の子がいるけれども農業を嫌って學問をしている。いつになったら出世してくれるのかね。と言うと、長男の王大が「父親母親在上。農業などやって何になりましょう。十年學問した私です。一ぺんに合格してみせます」というと、次男の王二も同じ意氣ごみを示すが、三男の道化役の王三は「父親在上、母親在下」と言い出し、あわてて「いい加減なことを言うでない。お母さんがどうして下であろうか」と父親が言いつくろうと、王三は臆せず、「我小時看見俺爺在上頭、俺娘在底下、一同牀上睡覺來」と言う。ここまで譯してくると學生たちはクスクスと笑いをこらえる。まじめな發表者は「どこがおかしいの。まちがっている？」と隣の受講者に尋ねるのでなおさら笑いが止まらなくなり、先生はと正面を見ると、先生も顔を赤くして笑いをこらえていらっしゃる。

こんなふうに笑いから始まるこの劇本は、第一折に入ると、父親は權勢を誇る皇親葛彪に殺害され、それに怒った王大王二は仇討ちと稱して葛彪を殺してしまう。悲嘆する母親の「兒也。你每做下這事、可怎了也」ということばは前の楔子に見えた明るい家族が一轉して絶望の窮地に墜ちたことを示す。

第二折に入ると有名な名裁判官侍制包拯が登場し、複雜な家族關係が事件を解決困難にしていることを一つの夢で知る。小さな蝶が蜘蛛の網にかかっている、と見ると大きな蝶が他の小さなを連れて網の中の蝶を助けようとする。このくだりは白の中の「詩」で朗誦されるのである。次第に王大王二の身替りになった王三は實は母親の實子で、兄たちは

先妻の子であることがわかってくるが、再び「詞」で包拯は惱みを觀客に訴える。

第三折では、兄二人は釋放されて父の葬儀を終るが、母は死刑囚となった王三に自分の獄中の食物を與えている。包待制は王三の身替りを作って王三を助ける。

第四折は團圓の場面で、包待制は又も「詞」で次のように宣言する。「你本是龍袖矯民。堪可爲報國賢臣。大兒去隨朝么當。第二的冠帶榮身、石和做中牟縣令。母親封賢德夫人、國家重義夫節婦。更愛那孝子順孫。今日的加官賜賞、一家門望闕霑恩」。母親は三兄弟と共に拜謝して「萬歲、萬歲、萬々歲」と言う。末尾に題目と正名が八言の對句となって劇全體の內容を集約している。

私は竹田先生にこの戲曲を學び、今日の中國にも裁判の公平を訴える人たち、貧窮に屈せず儒教の傳統を守ろうとする若者、王三のように兄弟の犧牲になって母親を守ろうとする樂天的な少年、こういう人たちがきっと逞しく生きていると信じた。この古典演劇は上演されなくなっても、この劇本は現在も未來も讀み續けられるだろうこと思った。

先生が敗戰間もなく燒土の大學の教室で、空腹をかかえて聽講している私たちにこの作品を通して教えて下さったことは、演劇に於ける人間の精神の調和であり、そういう中國人への理解であった。やがて數十年を經た現今、中國は經濟的に急速に發展し、日中の交流は日增しに頻繁になったが、中國文學を通して中國人を知り、同時に日本人を知るということを眞先に教えて下さったのが竹田先生だったのである。